社会に向き合いつつある、ミュージアムの人々

Wei Wenjun（北海道大学プラス・ミュージアム・プログラムスタッフ、北海道大学大学院文学院博物館学研究室 博士後期課程）

今回は北海道内のさまざまな地域や館種のミュージアム関係者18名を招待して情報交換会を開催しました。その目的は、道内のミュージアムが向き合う地域課題の特殊性や共通点を整理し、今後の議論に資する土台を共有することにあります。また、情報交換会での成果は次年度以降に本事業で扱うべき課題を洗い出すためにも活用することを想定しています。

情報交換会の企画を担当した卓彦伶特任准教授は、事前に「観光」、「記録と記憶」、「社会包摂・文化多様性」の3つのトピックを設定し、参加者を専門分野や所属によって4つのグループに分けてそれぞれにトピックを割り当てました。情報交換会当日、参加者はまず1人ずつ自己紹介をし、これまで携わってきた博物館事業の内容と、所属グループのトピックに関する感想を話しました。そして、グループディスカッションを通じて、今後新たに実践したい活動や事業の企画を行い、発表しました。自己紹介とグループディスカッションはとても盛り上がり、発表も楽しい雰囲気でした。

グループAは「ミュージアムの擬人化」を提案しました。ソーシャルメディアを活用しながら、ミュージアムを代表するキャラクターを制作しマーケティングする企画

です。グループBはミュージアムの情報発信の問題点に気づき、学芸員がバスガイドになってミュージアムを案内するバスツアーなど、ミュージアム間の連携を強める企画を考え出しました。グループCは「学芸員は何者か」を巡って、学芸員の存在と仕事内容を理解してもらう展覧会を発表しました。グループDは貸し出しできる教育キットの開発を提案しました。学校や家庭などの教育現場でもミュージアムの資料と企画力が活用できる事業です。

私は事務員の1人として、そして博物館学を学ぶ大学院生の１人として、情報交換会を傍聴させていただきました。参加者の熱意を感じながら、「ミュージアムが社会に向かう顔」の話題に思いを巡らせました。長らく、ミュージアムはハコモノのイメージが強く、学芸員をはじめとした職員は統一した名前と硬い建物の裏に隠れていました。最近では、ミュージアムの内部を紹介する番組、担当学芸員の名前を明記する展覧会、公式SNSアカウントで活発に情報発信するなど、ミュージアムの人たちが社会に積極的に向き合う動きが増えています。グループBが提案した情報発信企画、グループCが考えた学芸員をテーマとした展覧会、グループDが考案した教材制作と出前授業も、この動きを思い起こさせました。それは社会的役割を果たすことだけでなく、ミュージアムが権威性を自ら薄め、利用者との関係性を見直す風潮にも繋がっていると思われます。

一方、現在のSNS社会では、偽情報の拡散、炎上騒ぎ、プライバシーなど多くの新たな問題が引き起こされています。ミュージアムが社会に向き合う際には、特にSNSで活動する場合には常にこれらの問題に直面しています。グループAが提案した「ミュージアムの擬人化」は、キャラクター作成や擬人化されたソーシャルアカウントを通じて、親しみやすい全体的なイメージを構築することと、学芸員の研究活動の信頼性や教育部門の教育活動の専門性など、ミュージアム施設としての「ブランド」を保つことの間でバランスを取ることができると考えられます。

本年度にプラス・ミュージアム・プログラムが開催したイベントでは、新型コロナウイルスの影響により、いずれの回でもオンライン参加の比率の方が高くなりました。遠方からの参加が容易になった一方で、人と人が直接交流する機会が少なくなったように思われます。そのような状況の中で、道内の様々な地域で活躍しているミュージアム関係者が同じ空間に集まり、声や表情、動作を通してお互いの経験と課題を共有する情報交換会は、非常に貴重な場になりました。

2022年度クロージングフェスタ「対話」と「寄り添い」
地域とともにあるミュージアムのあり方を考える情報交換会
参加者レポート

「ミュージアムを足してみる」からはじまる学際的な学びと実践

森 沙耶（北海道大学大学院教育推進機構 科学コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP学術研究員）、元科学館職員）

1日目は「ミュージアムの価値をどう創造するか」と題し、経営学者の石井淳蔵先生と評価学者の源由理子先生による講演と対談が行われた。

「博物館分野での講演ははじめてで…」と少し戸惑いながらもご自身の専門であるマーケティングやブランドづくりについて事例をふんだんに交えながら紹介してくださった石井先生。石井先生から語られる話はどれも私たちの知っている身近なブランドでの事例で、しかしながら経営学という鋭い専門性と行き来するような非常に刺激的な講演であった。

源先生は、ご自身が実践されている協働型評価について

実際に行った博物館や行政機関での評価ワークショップの実践事例を交えながら紹介した。現場の実践知や暗黙知と、データなどのエビデンス双方が、対話を通して公共的なものへ合意形成されていくものであり、そこに重要なのは「汗をかくステークホルダーがいること」という、ロジカルでありながらも人の力や繋がりによって為されていく評価の奥深さを改めて知る講演であった。

経営と評価、そしてミュージアムという分野を超えたインタラクションがこれからのミュージアムにどのような影響をもたらし、どう変化していくのだろう、と考えると今日の学びを誰かと共有したい、そんな思いになる講演と対談であった。

ミュージアムに経営学を足す、評価学を足す、プラス・ミュージアム・プログラムのこれまでの講義であらゆる角度から提案されてきた「ミュージアムに足してみる」という考え方。そして、「あらゆるものにミュージアムを足す」という考え方。

これまでの多種多様な講師による講義の一つ一つの提案がつながって具体的な形として見えたのが2日目に行われた「地域とともにあるミュージアムのあり方を考える」情報交換会であった。

道内のミュージアム関係者およそ20名が集まり4つのグループに分かれてそれぞれ「観光」「記憶と記録」「社会包摂・文化多様性」の中からテーマを選択し、それについて企画をするというワークショップ形式の情報交換会。集まったミュージアム関係者はミュージアムの学芸員に限らず、行政担当者、アーティスト、ミュージアムグッズ愛好家、地域の広報を担う会社のスタッフなど、館種も職種も異なる、誰一人として同じことをしている人がいないようなメンバーであった。

アイデアをブレインストーミングするようなワークショップは今までもあったものの、各々が経験してきたものを持ち寄り、ミュージアムというゆるやかな共通項のあるメンバーでディスカッションする時間は、刺激と共感で満ち、これほどあっという間に感じるものかというものであった。他のグループの企画を聞いても、「こう来たか！」と唸るような、そして今すぐにでも企画書を作って形になってほしい企画ばかりであった。

これまで座学で行われてきた「何かを足す」という提案は、現在ミュージアムの場にいない自分の実践からは少し距離があった。新しい概念や事例を知る面白さと満足感のあと、振り返った時にどのように活動に落とし込めばいいだろう、という課題を常に与えられているような感覚が残っていたのである。

プラス・ミュージアム・プログラムはいずれの講演も対面とオンラインを併用して行われていた。聴講者に道内外のミュージアムで働く学芸員の方が多く参加しているのを目にしていたこともあり、いつもこの提案をどのように自館での活動に反映させるのか一人一人に尋ねてみたいような気持ちでいた。

この気持ちが昇華されたのが、ワークショップであったのだ。

そしてわかったことは、ミュージアムにいれば実践できるのではなく、ミュージアムに身を置いていても、様々な要因でこれらの提案を実践に変えられないジレンマを抱えているということであった。そのような中でも自分の持つ経験、役割、スキルにこの学びをプラスしてどうにか形にできないか、それぞれが模索していたのだ。さらにミュージアムで働いていたときならすぐに気づけたであろうことが、私には見えなくなっていたということにも気づいてしまった。

対話と寄り添い。まさに今回、自分というミニマムな単位でも起こった対話によって他者に寄り添い新しい知見を得ること、これこそがプログラムを通して提案されてきたことなのだと、振り返ってはじめて認識するのであった。